

外国出張概要

韓国の古建築保護事業 1970年9月2日より30日の間、韓国に出張し、彼国における古建築および関連文化財の研究と、文化財保護事業の実施状況の調査を行なった。調査はきわめて短時日ではあったが、文化財管理局、国立博物館、慶州市その他各方面各位の御厚意によって、きわめて多くの収獲を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

韓国においては文化財保護行政は、文化公報部の外局である文化財管理局がその任に当たっている。局は庶務、文化財、管理の三課と文化財研究室、および付属の文化財委員会からなっている。このうち主として行政事務を担当するのは文化財課であって、管理課は旧王宮管理を業務とする。文化財研究室は、民俗学、無形文化財、美術工芸、建築学、保存科学の各分野の専門家を集めて、専門的技術的事項を扱っている。文化財委員会は諮問機関であるが、委員のほか多数の専門委員を持つ。専門委員は工事監督等の実務を分担している。このほか、部の付属機関としては、国立博物館（慶州・扶余・公州に分館がある）と国楽院がある。

指定物件は宝物（日本の重要文化財に当る）が木造建造物84件、石塔175件、他に美術工芸品等を加え総数641件であって、このうち特に貴重なのは国宝に指定されている。以上の有形文化財に史蹟（183件）等を加え、文化財総数は859件となっている。

建造物修理事業は相当活発で、現在現場は20棟ほどある。うち5棟が解体修理で、このなかには高麗時代の遺構鳳停寺極楽殿も含まれている。その他は屋根葺替や塗装工事であるが、他に特別な大工事として仏国寺の復旧工事がある。修理には国、道、市、郡の補助金が出され、市又は郡が工事の実施に当る。しかし実際にはほとんど全額国库補助金である。工事監督には文化財研究室員や文化財委員会専門委員がこれに当る。施工は入札による請負制であるが、業者は国家試験に合格した技術者のいる文化財保存業者（12社）に限られている。

新しい問題を含んだ修理工事現場の例としてソウル南大門をあげておこう。この門は1448年の建築であり、李朝初期を代表する建築として国宝に指定されており、首都の象徴としての意義も大きい。この門は1962年に修理が加えられ、屋根葺替と塗装が行なわれたが、近年都市の発展にともない、門は街路の中島にとり残され、周囲は終日自動車の渦がたえない。このため、排気ガスの影響いちじるしく、湿気の影響もあって、修理後わずか7年で彩色はすっかり黒ずみ、石垣表面にも黒色ススが付着、今回の修理となった。

文化財管理局庁舎前では、試料の曝露試験を併行して実施中であった。

（伊藤延男）

第1図 修理に着手したソウル南大門

アフガニスタンの調査 クシヤン朝文化を中心とする中央

アジアの考古学的調査を目的とする京都大学第二次中央アジア学術調査の第1回調査隊員として、昭和45年9・10月の両月アフガニスタンにおいて、主としてパーミヤンの仏教遺跡の写真測量に従事した。パーミヤンはアフガニスタンの中央をほぼ東西に横切るヒンズクーシュ山中の盆地で、海拔2,500m、首都カブールから北西約240kmの地である。

仏教時代、この地には石窟を中心とした大伽藍が営まれ、当時の盛況は玄奘や慧超の記録からもうかがえる。この石窟寺院の中心は東西の大仏像（像高東35m、西53m）であり、両石仏の龕の頂上には現在も壁画が残っており、また多数の石窟にも建築装飾や壁画が残っている。パーミヤンには

第2図 パーミヤンの石窟

他にフォラディ谷の石窟群、カクラク石窟群などがあり、総延長は数kmに及ぶ。今回の調査では53m像、35m像それぞれの立面図作成と、それらを含めた約1kmにおよぶ断崖にうがたれた多数の石窟群全体の立面及び平面図作成のための地上写真測量を行なった。（牛川喜幸）

インドにおける遺跡の展観

1971年2・3月にかけて西パキスタン・インドの遺跡を訪れ、遺跡の保存・整備・展観と遺跡博物館の視察調査を行なった。インドにおける遺跡の調査・保存は、J. マーシャルと M. ウイラーによっておし進められ、遺跡博物館の構想を生みだしていった。西パキスタンのモヘンジョダロ、タキシラ、バンボール遺跡は、いずれも広大な規模を有し、部分的に発掘された遺構は、きれいに補修・整備され、特に遺構内の排水には工夫をこらし、遺跡の一部に覆屋を設け、遺構の保存・展観につとめ、主要な遺構には、その名を表示している。遺跡のそばに遺跡博物館があり、出土遺物を展示し、遺跡案内官をおき、遺跡案内書を備えている。ただモヘンジョダロの都市が水位の上昇及び風化により崩壊しつつあるのを、いかにくい止めるかが重大な問題である。インドにおける遺跡の調査・保存・展観方法は、ほぼ西パキスタンと同じである。古建造物の補修として、アジャンター洞窟壁画は、かなり剝落止めが施されている。カジュラホ寺院を飾る彫刻群をはじめ多くの石造建築は、きれいに整備されていた。このように、遺跡の発掘調査とともに遺跡の保存・整備・展観が重要視されているのである。最後に特筆すべきことは、ニュー・デリーにある考古学院が、修士および同程度の学歴を持つ学生10名に20ヶ月間（内6ヶ月間は、カリバンガン遺跡の発掘実習）で考古学の専門課程を研修させ、専門家の養成をはかっていることである。（菅原正明）

第3図 タキシラ・ジャンディヤール遺跡